

## 明治五年頃の洋畫

△黒田清輝氏談

東京日々新聞が明治五年に生た其頃の畫界に就ての状況を托話することが出来たら嚙ぞ面白からうが其御り居た本多錦吉郎君に聞くより途はあるまい氏は當時の實況を熟く見てみた今日洋畫の進歩は本多氏が繋ぎになつて居るこの時代は維新後新人物のボツ／＼あらはるゝ時代だつたらうと思はれる私共は無論子供のことなり洋畫をやらうと心懸けたのも遙か後の事であるから此時代の事は聞いたことによつて托話するより外仕方がないこの明治四年の頃に工部省の中に工學寮といふのができた虎の門内の元の延岡邸に置かれたのである後九年に及んで美術學校といふのが設けられた此の學校が日本での正式に洋畫を稽古する濫觴である之は東伏見宮御邸おやしきの處にあつて四五年前まで此建物が保存された

▲冬崖の石版刷 明治五年頃で私共の知つて居るのは川上冬崖氏が石版の印刷を始めたといふ話だ此の冬崖といふ人は小山正太郎氏の師匠である其翌年に横山松三郎氏が池の端で家塾を開高橋由一といふ人が濱町に天繪舎といふ畫學校を拵らへた明治七年に國澤新九郎氏が英吉利から歸つて來る

▲率先者の祭典 かういふ次第で川上と高橋は當時の大家であつた今日洋畫といふ點から見ると先づ幼稚なものだが新らしき智識を注入することには餘程つとめられたものである昨年でした古く洋畫をやつた人達即ち率先者の祭典を企てたものがあつて同時に製作品の幾分が陳列された其内で尤も感心したのは横山松三郎氏の作品で其

人の自畫像が二枚も出て居つたがまことに親切な書き方でよくこれほどに描けたものだと思つて實に驚いた位だ  
 一見伊太利の復興期少し前の畫を見るやうでありますこの横山氏のことを後に聞いて見ましたら——此人の姓名  
 は二三年前に耳にした日本で行つた寫眞術の元祖ださうな——其人の直接の門下生の中に内幸町で寫眞師をして  
 居る成田常吉氏でこの成田氏から或一寸した機會おひに横山氏の話聞いたこの機會は誠に妙な機會で友人又先輩と  
 する山本芳翠氏が歿しました折であつた山本氏の死んだのが三十九年十一月十五日で其一ヶ月前である横山松三  
 郎氏の祭典を營んだ席上で山本氏が横山氏を慕つて願くは氏の墓の隣りに埋めて貰ひ度いといふたが計らずも一  
 ヶ月目に死んだ親族故舊が其遺志を承けて泉岳寺の横山氏の墓畔に埋葬した其日に聞いたのである此の横山松  
 三郎氏といふ人は寫眞屋が本職で傍ら油繪を描た其時代の人では餘程卓絶した人だらうと思ふ兎に角技術は親  
 切である

▲明治美術會 其他になると數多く知らぬ尤も高橋由一氏は澤山描いたから相應に見てゐる川上冬崖氏の日本畫  
 は見たが洋畫は未だ見たことがない引續いて西洋美術が大分輸入したやうである紙幣寮でエドツド、キヨツ子  
 といふ伊太利人を雇入れたのが明治八年で十年には内國博覽會が上野に開かれて美術部が設けらるゝ夫から少し  
 後に至つて洋畫は一時勢力を失つた失つたといふと語弊があるかも知れぬがとにかく前述の人達が明治四五年か  
 ら六七十年にかけて洋畫の根柢を築いたのが聊か躓くたづいて來ましてそれは所謂國粹保存の議論が大分盛んになり爲  
 めに挫折したものと思はれる其間我々の時代の繋ぎになる人は本多錦吉郎氏を始めとして二三の人物はあれど餘  
 り聞没た人はなかつたらしい降て我々の時代くだに移る少し前に洋畫を以て現はれたる人達は工部大學校で養成され

た人達で之が成熟して又新たな機運を開きかけた其開きかけたのは今日我等の時代を作る土臺になつて居る工部大學から顯はれた人は先年歿した淺井忠、小山正太郎、松岡晝、彫刻科に大熊氏廣、藤田文藏、長沼守敬、佐野昭、菊池鑄太郎の諸君で大學に關係の無い畫家では高橋由一氏の塾で安藤忠太郎氏、五姓田芳柳氏の門下で山本芳翠氏等であつた、それに松岡晝氏だの高橋氏の塾から出た當時の畫才原田直次郎氏並びに前記の山本芳翠氏が前後して歐洲から歸つて來た是等の諸君が團結して組織したのが明治美術會で西洋美術發達の第二期である、其の後私共が歸朝して其の餘響を承け引き續いて發達の途を講じたのでありますが、丁度時が明治二十六年の頃で國運の發揚さるゝ時代に出遇つた爲めに益々斯道に力を盡す人も多くなり日清戰爭、日露戰爭を経て戦後の景氣は次第に洋畫の品位を進めて行くことが出來て竟に一昨年に至つて公設展覽會などが開かれることになつた先づ大略斯の如き経路であるが今や漸く序幕が開きかけたと云つてよからう愈々本統の芝居になるのは之からでそれには相當の道具立が要る役者も揃つて居らぬ追々養成しなければならぬ

▲保護機關の設備 今日政府或は國民に向つて要求する處のものは澤山あるが其内でアカデミーとでもいふやうな保護獎勵の機關ができて而して其機關が段々不足したものを補つて行くといふのが今日の急務だらうと思ふ

▲紅い隣の花 是等の順序を経て來たので東京日々新聞は明治五年に生れたと聞いたが洋畫なども矢張同時代に生れたと云つてもいゝ位なもので新聞紙に就ては却々立派な發達で今日大いに之を祝せざるを得ないがさて同時に生れた洋畫は前途遠遠である恰も新聞の祝賀あることを聞いて隣の花の紅いのを羨むやうな氣持がします

〔『東京日日新聞』明治四年三月二十九日〕

本文献中の「率先者の祭典」とは、明治四一年に東京赤坂溜池の三会堂で営まれた洋風美術家追弔会のことであろう。本多錦吉郎や中村不折、小山正太郎ら当代の洋画家によって発起された同会は、川上冬崖から浅井忠に至る物故画家六十八名を祀り、別席には遺作を陳列、その記念として小冊子『追弔記念洋風美術家小伝』が編まれた。